

水島 メモリーズ

呼松の今昔編



海辺のまちのエピソード



旧呼松郵便局 (写真：山口百香)

岡山県は多くの映画やドラマのロケ地になっています。とくに昭和な雰囲気を出す風景は好まれており、水島では遠景の工場と田園風景が重なる宇野津や、漁村と工場のコントラストが印象的な呼松が作品に登場します。呼松では2022年の映画『とんび』が撮影されました。呼松の漁港に阿部寛と北村匠海、八幡神社に麻生久美子が出てきたことが、作品を見ているとわかります。

水島の東側を占める福田地区の中心は、呼松だった時期がありました。明治期には呼松の戸数・人口が他の集落に比べて圧倒的に多かったのです(福田町誌編集委員会編『福田町誌』福田町誌刊行委員会、1958年、36頁、38頁)。

昭和初期につくられた旧呼松郵便局(2014年10月10日廃局)は、アールデコ様式が取り入れられ、ステンドグラスや出窓があるしゃれた建物となっています。「呼松には何でもあったよ。映画館もダンスホールも、飲食店もなんでもあったよ」と住民の方から教え

ノスタルジックな風景

目次

ノスタルジックな風景	p3
呼松エピソード	p5
コンビナートとの共生と呼松の未来	p10
地域カフェとみずしま財団について	p14



江戸時代は呼松と王島の間は海で隔てられていたが、潮が引いたら下駄で歩けたとのこと。呼松の人形師だった中田善博さんの絵(所蔵：中田市男)

でもらいました。今も煙突が残る中田酒造の日本酒「飲の泉」は、JALの国際線ファーストクラスでも使われていたそうですが、同社は2009年に廃業されたようです。

呼松は船で往来をする商業のまちでもあり、漁業のまちでもありました。呼松の前に広がる海は、平家物語で語られている水鳥合戦があったところです。1183（寿永2）年、平家の大将・能登守教経は、呼松から船出し合戦に

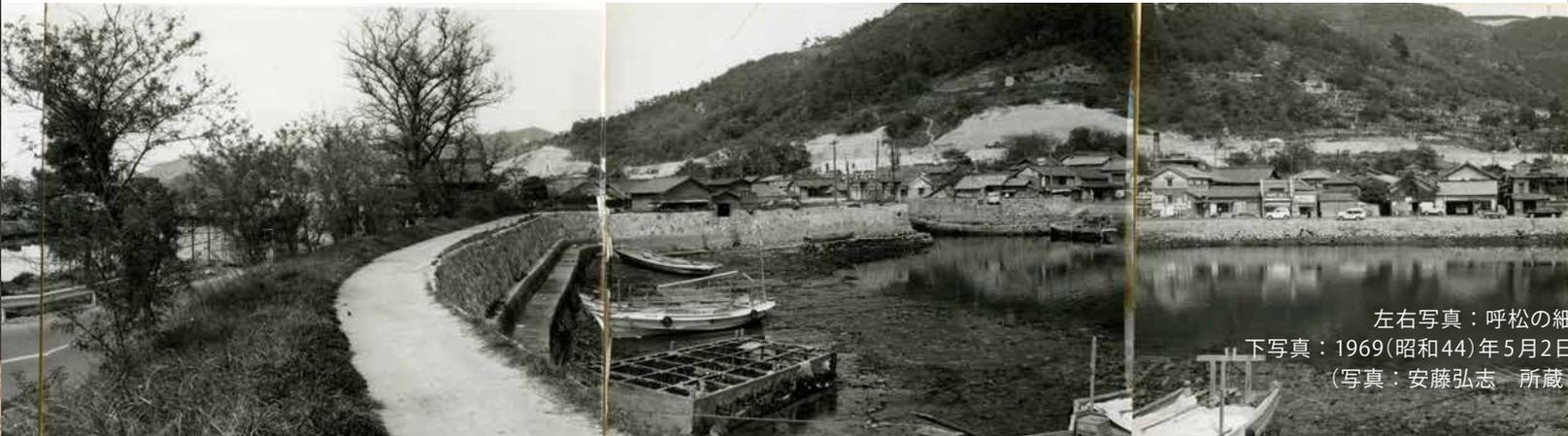
勝利したといわれています（前掲『福田町誌』151頁）。

歴史の長い社寺もあります。真言宗の安楽院は、1326（嘉暦元）年に建立された古寺です。前述の八幡神社も、安楽院と同じ年に創建され、福田地域で一番古い神社です。この神社では、650年以上も続くといわれる御佐曾^{おんさそ}宇という行事が元旦の未明に行われます。まちの人たちが奏上文を朗唱し、くじ引きをするお祭りです。

呼松エピソード

埋め立てられる前の水鳥地先は遠浅の海で、海藻・海草がたくさん生えていたといいます。古老の話によれば、潮が引くと隠れている魚を手づかみでとることができたほど、豊かな海でした（丸屋博『公害にいとむ——水鳥コンビナートとある医師のたたかい』新日本新書、1970年、14頁）。ところが第二次世界大戦後、

呼松の目の前にもコンビナートがやってきました。はじめは食糧増産のための農地造成です。呼松の南（現在、水鳥臨海工業地帯C地区、ホームプラザナフコ南倉敷店がある）、と西側（現在B地区、三菱ケミカルなどがある）が干拓されたのですが、それがのちに工場用地に転用されていきました（前掲『公害にいとむ』96～97頁）。



左右写真：呼松の細い路地（写真：山口百香）
下写真：1969（昭和44）年5月2日 呼松水門と呼松のまち
（写真：安藤弘志 所蔵：倉敷市歴史資料整備室）

水島港に大きな船が入れるようにするため航路が深く掘られ、その土砂がコンビナート用地の埋め立てに使われました。亀島山や王島山でも1960年頃から埋め立てのために土砂が削られたようです(倉敷市史研究会編『新修倉敷市史 第7巻 現代』倉敷市、2005年、600～601頁)。

海への玄関口だった呼松は工場に囲まれてしまい、海と大気への汚染が深刻になりました。とくに1964(昭和39)年は環境の激変が起きた年として記憶されています。この年、化成水島(現・三菱ケミカル)が試験操業を開始したのです。そのとたん48メートルのフレアスタック

(廃ガス燃焼塔)から騒音激しく炎が立ちのぼり、夜の闇を明々と照らしだしました。環境保全よりも経済活動が優先される風潮の中で起きた事件でした。

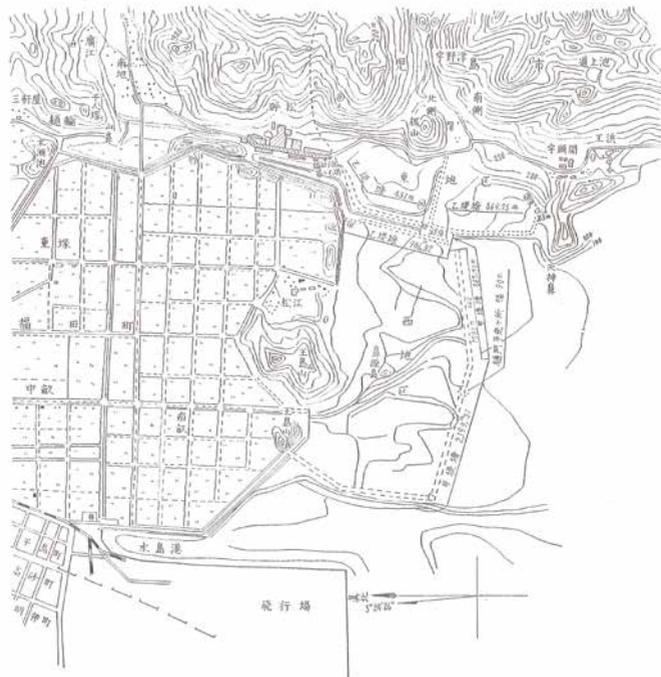
住民は公害対策委員会を結成し、700人が工場にデモ行進を行いました。これは「呼松エピソード」と呼ばれ、水島での公害反対運動のはじまりとされています(前掲『公害にいとむ』42～46頁、前掲『新修倉敷市史 第7巻 現代』428～429頁)。

海の汚染も1964年以降、悪化しました。水島合成(現・三菱ケミカル)と化成水島が呼松港に廃液を流すようになり、異臭魚が増えたのです。

1965(昭和40)年6月には、死んだ魚が大量に海面に浮かぶという事件も起きました(前掲『公害にいとむ』63～64頁、前掲『新修倉敷市史 第7巻 現代』420～423頁)。

1973(昭和48)年、熊本水俣病の発生地から少し離れた有明海でも水俣病と同じ症状の患者が見つかったと報じられたため、環境庁(当時)は、水島を含む全国9汚染水域の緊急調査を実施しました(原田正純『水俣病は終わっていない』岩波新書、1985年、67～84頁)。岡山県でも、複数の工場から約94トンの水銀が行方不明になっていることがわかったり、水島およ

福田干拓平面図



福田干拓平面図
(出典：岡山県編『水島のあゆみ』岡山県、1971年、61頁)



1964(昭和39)年7月22日 呼松エピソード。
抗議のために呼松公民館に集まった住民(所蔵：みずしま資料交流館)



呼松の夜の風景。フレアスタックが描かれている
 (絵：中田善博 所蔵：中田市男)

報告書を読むと、当時の住民の思いが浮かび上がってきます。住民からは「集団移転」の要求も出ていましたが、これは文字通り、地区を去る“という意味ではなく、住み続けたいと願う人たちを含め、公害対策を求める地区住民の意思を集約し、行政や企業に対して声を上げていくためのスローガンだったようです。公害によって分断されながらも、地域の声をまとめていこうとする住民の苦勞を見てとることができます(前掲『水島臨海工業地帯に隣接する「地区住民の生活の実態と将来」に関する総合的調査報告』250～251頁)。

なお、この調査に参加した中野卓が、呼松の老女の聞き書きをまとめた『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代』(御茶の水書房、1977年)は、社会学などの研究者の間でよく知られる古典になっています。

び周辺で操業する工場の従業員の頭髪から高濃度の水銀が検出されたりして、大きな問題となりました(『山陽新聞』1973年6月14日付社説)。呼松水路も、県議会で浚渫が議論されるなど、水銀汚染が心配されていたのです(『山陽新聞』1973年6月5日付)。

漁業は窮地に立たされます。1960(昭和35)年に59戸あった呼松の漁家は、1971(昭和46)年には、半数以下の19戸まで減ってしまいました(地域生活研究会『水島臨海工業地帯に隣接する「地区住民の生活の実態と将来」に関する総合的調査報告——倉敷市呼松・松江・高島地区の事例』1972年、36頁)。

当時、倉敷市が社会学者のグループに委託して、呼松など3地区を対象に実施した住民意識調査があります。その



1902～03(明治35～36)年頃の呼松の風景(絵：中田善博 所蔵：中田市男)

コンビナートとの共生と呼松の未来

みずしま地域カフェで、呼松住民の方々からお話を聞きました。

元漁業者の男性は「漁ができるならもつとしたかった。でも漁師では食べていけないので、工場に働きに行った」と話します。卸や加工を営む水産会社はありますが、呼松にはもう漁師がいないそうです。

「昔は、春はサワラ、秋はマナガツオがとれた。今は釣りに行っても、タイとベラしかとれない。昔はイイダコが10キロも取れたけど、今は1キロもとれ

ない。コウイカもママカリもとれなくなった。燃料代の方がかる」。

妹さんも「漁ができなくなっただ代替として、呼松の南側の干拓した土地をもらっただけ、農業の経験がなかったからできなかつた」と話してくれました。

かつて呼松は、娯楽の中心だったそうです。「昔は、郵便局、銀行、小学校、派出所、映画館、銭湯、ダンスホール、パチンコなどいろいろあつたけど、みんな（水島ICに近い北隣の）

広江に行ってしまった」。「呼松はお祭りがあつてにぎやかだったし、土手から水路に降りて泳ぐのも楽しかった」と昔をしのぶ声が多く聞かれました。

呼松は山と海岸の間にはさまれた南北に長い集落で、細い道が縦横にはりめぐらされており、自動車が移動手段の中心となる前にできたまちであることがよくわかります。自動車には不便なので、若い人たちが出ていってしまうといえます。「今は海で泳げないし、工場の煙も臭い。音もうるさくて、寝



1961(昭和36)年1月4日 呼松の風景。
グリーンベルトはなく、海岸線ギリギリに住居があることがわかる
(写真：安藤弘志 所蔵：倉敷市歴史資料整備室)



1969(昭和44)年5月2日 左に水門とコンビナートが見える
(写真：安藤弘志 所蔵：倉敷市歴史資料整備室)



1972(昭和47)年3月 呼松のまちとコンビナート。王島山が見える。
 左手前は国道430号で、これができたことも、呼松が変化したきっかけとなった
 (写真：安藤弘志 所蔵：倉敷市歴史資料整備室)



1961(昭和36)年1月4日
 左上に安楽院。住宅街の中に丸い屋根の郵便局が見える
 (写真：安藤弘志 所蔵：倉敷市歴史資料整備室)

呼松の昔の写真や資料などをお持ちの方は、ぜひご提供ください。
 (みずしま資料交流館)

られないこともある「船も真つ黒け」「今も呼吸器疾患の治療を続けているよ」。

それでも「呼松に住み続けた」といいます。「呼松ええよ。遠慮がない関係。みんな親切なんよ」と笑いあいます。「安楽院のご詠歌をみんながするし、ジャガイモも借りあう仲」だそうです。かけがえのない、ふるさとのコミュニティがここにありました。

「呼松エピソード」にはじまる水島の公害反対運動は、1983(昭和58)年の公害訴訟提起へとつながっていきます。その中で1995(平成7)年につくられた「水島再生プラン」に

は、コンビナートと共生できるまちにしたいという願いが描かれました。

現在では企業や行政の姿勢も変わり、公害規制も強化されています。工場の工事やトラブルの際には、住民と企業との話しあいをもつことができるようになったそうです。こうした変化は、地域の運動があつたからこそです。もちろん今でも事故が絶えないなど、課題も多く残されています。まだまだ、声を届けるための努力は続けていくことが大切ですが、50年前に呼松の人たちが求めた、住み続けられるまちの将来像は、少しずつ実現しつつあるのです。

地域カフェについて

戦争、地域開発と公害など「困難な過去」にも目を向けながら、水島の歴史を掘り起こすとともに、地域の新しい魅力を発信するための冊子です。みずしま財団が2021年度から取り組んでいる「みずしま地域カフェ」で得られた情報をもとに作成されています。地域カフェは地域の歴史について学び、将来のまちづくりの方向性などを語り合う場です。ぜひご参加ください。



みずしま財団について

みずしま財団は、正式名称を「公益財団法人水島地域環境再生財団」といい、2000年3月に、水島地域の環境再生・まちづくりの拠点として設立されました。

住民を主体に、行政・企業など水島地域の様々な関係者と専門家が協働する拠点として、よりよい生活環境を創造する活動を展開していくために、調査活動をはじめ、学びの場づくり、人とのつながりづくり、そして公害の経験の継承と公害患者支援などを行っています。2022年10月、ミニ資料館「みずしま資料交流館」を開設しました。



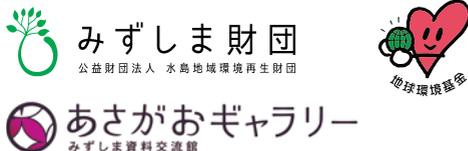
1961(昭和36)年11月4日 生姫島。後鳥羽天皇の皇子、頼仁親王は承久の乱により児島に流された。頼仁親王の妃が、この島で王女を生んだので、生姫島と呼ばれるようになったという。現在は三菱ケミカルの中にある。
(写真：安藤弘志 所蔵：倉敷市歴史資料整備室)

表紙写真：呼松のまちと水島コンビナート(写真：橋本正広)
裏表紙写真：「飲の泉」を製造していた旧中田酒造(写真：山口百香)
文：林美帆(みずしま財団)、除本理史(大阪公立大学)
協力：井上睦美(倉敷医療生活協同組合)、滝野教明
デザイン：山口百香(Myu dear,)
発行日：2024年1月
発行：公益財団法人水島地域環境再生財団・みずしま資料交流館(あさがおギャラリー)
〒712-8033 岡山県倉敷市水島東栄町11-12 TEL: 086-440-0121

地球環境基金の助成を受けて作成しました

会員募集

『水島メモリーズ』が届くみずしま財団の年会費は **3,000円(個人)**
みずしま財団の活動をご支援ください(税控除対象)
ゆうちょ銀行 店番一三九 店(イチサンキョウ店) 当座 口座番号 0036797
どうぞよろしくお願いいたします



みずしま財団
Webサイト





水島
メモリーズ